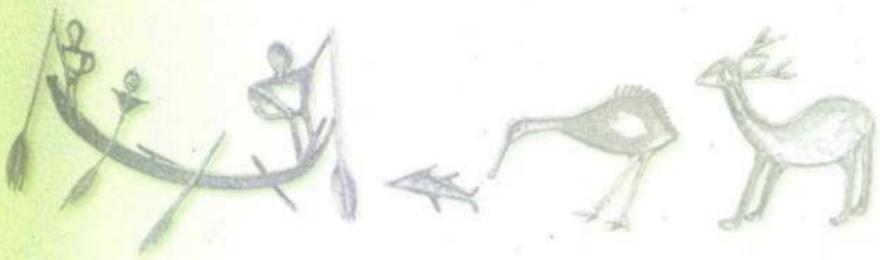
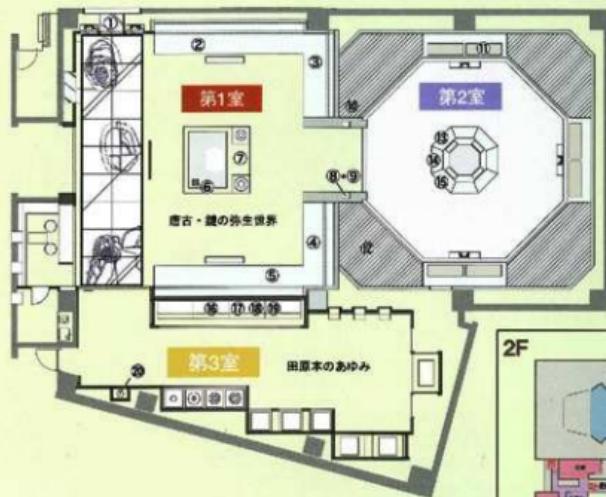


唐古・鍵考古学ミュージアム

ミュージアムコレクション

Volume 1





ミュージアムの平面図と展示位置



田原本青年生涯学習センター部分図

目次 Contents

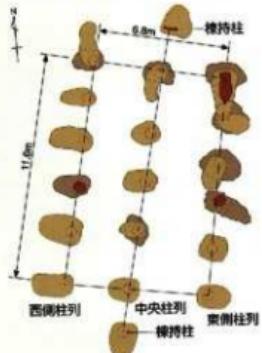
◆第1室◆

- No.1 大型墳物跡のケヤキ柱.....(1)
 No.2 発掘された弥生人骨.....(2)
 No.3 稲穂を模した石磨丁.....(3)
 No.4 河内から運ばれた土器.....(4)
 No.5 烏をかたどった土製品.....(5)
 No.6 桜蘭を描いた土器.....(6)
 No.7 扉と戈を持つ人物模型.....(7)
 No.8 ヒスイ勾玉を納めた褐鉄鉢容器.....(8)
 No.9 褐鉄鉢容器に納められたヒスイ勾玉.....(9)
 No.10 刻みのある板椅子.....(10)

- No.11 犬の噛み痕が残る土器.....(11)
 No.12 銅鐸を鋳造した土製鋳型の外枠.....(12)
 No.13 唐古・鍵に運ばれたサヌカイトの原石.....(13)
 No.14 糸を燃える紡錘草.....(14)
 No.15 大麻製の布切れ.....(15)
 ◆第3室◆
 No.16 まつりに使われた子持勾玉.....(16)
 No.17 笠形採集の和同開跡.....(17)
 No.18 まじないに使った墨書き人面土器.....(18)
 No.19 牛をかたどった土人形.....(19)
 No.20 入れ墨を表現した居持人埴輪.....(20)
 No.21 祭儀の場を表現した家形埴輪.....(21)

例言 Explanatory Notes

- 本書は、『広報たわらもと』平成16(2004)年12月号(№395)から平成18(2006)年8月号(№415)に掲載した「ミュージアムコレクション」第1回から第21回(このうち、第1回から第16回は、唐古・鍵考古学ミュージアム常設展示の解説シートとして印刷)を図・写真等を追加・補訂し、唐古・鍵考古学ミュージアムの展示品解説書として編集したものである。
- 本文は『広報たわらもと』に掲載したものと同じであるが、一部に表現などを改めた部分がある。また、展示品解説の順序(№)については、ミュージアムの展示順序に合わせたため、当初の№とは異なる。
- 本書の執筆、編集は河奈一浩・藤田三郎が担当した。



大型建物跡の復元平面図

No.1 大型建物跡のケヤキ柱

弥生時代の大型建物は神殿か？

ミュージアムに入ると、ガラス張りの床下に再現された発掘現場が、来館者の目を引きます。これは、唐古・鍵遺跡で初めて見つかった大型建物跡の一部です。また、入り口の左手には、この時に出土した柱を展示しています。

この柱は、直径60cmもあるケヤキ材で作られており、表面には石斧で削った明瞭な加工痕が残っています。また、柱の下部には、運搬用に縄を通したと考えられる「目渡穴」と呼ばれる貫通孔が開かれています。このような目渡穴は、2003年の第93次調査で検出された大型建物の柱にもみられ、蔓が残っていました。

このような柱を据える穴は、斜めに傾斜がつけられており、運んできた柱を斜めに差し込んだ後、一方から引っ張って柱を建てたと考えられます。また、建物の解体時には、多くの柱は抜き取られ、再利用されたようですが、この柱は再利用されずに邪魔になったた

◆コレクション・データ◆

時 代：弥生時代中期

調 査：唐古・鍵遺跡 第74次調査

発見年：1999年

大きさ：残存長 143.6 cm、直徑 59.6 cm

展示ケース：第1室 左ケースと床下

め、倒して埋められたものでしょう。
ところでこの柱が使われた建物は、梁行（建物短辺）
6.8m、桁行（建物長辺）11.6mの長方形と想定され
19本の柱で構成されます。面積はタタミ 50畳に相当
し、当時の建物としては最大級です。特に注目される
のは、妻側（建物の短辺）の外側に独立棟持柱と呼ば
れる柱が見られます。独立棟持柱を持つ建物は、
唐古・鍵遺跡の絵画土器にも描かれており、切妻造の
屋根を持つ高床建物と考えられます。

このような建物は神明造と呼ばれ、現在、伊勢神宮
で見ることができます。独立棟持柱を持つ建物が、古
い神社建築に類似することから、これを「神殿」と考
える研究者もいます。このような建物の性格について
は、さまざまな説があり決着していませんが、弥生時
代の社会構造や建築を考えるうえで重要な意義をもつ
ことは確かです。



人骨が出土した木棺墓

No.2 発掘された弥生人骨

渡来系人骨の発見

◆コレクション・データ◆

時代：弥生時代前期

調査：唐古・鍵遺跡 第23次調査

発見年：1985年

大きさ：長さ27.2cm、幅20.9cm

展示ケース：第1室「唐古・鍵ムラの人々」

1985年、唐古池の東側堤防の発掘調査で、板を組合わせた棺（木棺）に納められた2体の弥生人骨が発掘されました。

人骨は約2300年の間、灰色の粘土にパックされたため腐らず残っていましたが、骨の大半は豆腐のように軟らかく検出は困難な状態でした。このため人骨を土ごと持ち帰り、人類学の植原和郎・馬場悠男先生に調査を依頼しました。馬場先生により、豆腐のような人骨は保存処理され、みごとな頭骨が現れました。

馬場先生の研究によると、人骨は20代後半から30代前半の男性で、162cmと長身です。顔は面長・扁平で、渡来系弥生人の特徴を示しています。

現代の日本人の顔は、丸顔で二重まぶたの人と、面長で一重まぶたの人との2つのタイプがみられます。前者は縄文時代の人骨と、後者は渡来系弥生人の人骨と特徴が一致することから、現代の日本人は、日本列島に定着した縄文人が、弥生時代以降、渡来人と混

血を繰り返し形成されたと考えられています。

かつて金闇丈夫氏は、山口県上井ヶ浜遺跡で多量の渡来系人骨が出土したことから、大陸や朝鮮半島からの渡来人が、弥生文化の伝播に大きな役割を果したと考えました。しかし、渡来系人骨は、前期終わりごろの資料が大多数で、弥生時代の開始とは年代的な開きがあります。渡来人出現の背景については、検討の余地が残るでしょう。

さて、これまで弥生時代の渡来系の人骨は、北部九州から山口県に集中し、大陸・朝鮮半島からの渡来は地域的に限られた現象とされてきました。唐古・鍵遺跡での渡来系人骨の発見は、こうした考えを覆すもので、弥生時代の近畿にも、渡来系の人物が存在したことが明らかになりました。

唐古・鍵ムラの渡来系の男性が、何処から何故やって来たのか。ムラの成立を考える上でも、人骨が提起する問題は重要です。

Ishibōchō

Stone Reaping Knife



集積・埋納された石庖丁

No.3
稻穂を摘みとる石庖丁

弥生時代のイネの収穫

米作りが始まった弥生時代には、大陸から伝來した新たな石器類が農耕に大きな役割を果たしました。今回紹介する石庖丁も、稲穂を摘みとる農具として注目される石器です。

この石庖丁は、横長の半月形の一辺に刃部を作り出し、ほぼ中央に2つの穴をあけています。唐古・鍵遺跡では、前期は樅原市耳成山の流紋岩が、中期には和歌山県紀ノ川流域の結晶片岩が原石として使われました。今回の石庖丁は、濃緑色を呈する結晶片岩製で、全面に砥石で研いだ擦痕が残っています。

石庖丁にみられる二つの穴は、紐を通して手で握った時に指をかけ、稲穂を摘みとるためのものと考えられています。

現在、稲の収穫は根元から刈り取る「根刈り」が一般的ですが、これは弥生時代後期以降、徐々に普及したもので、稲作が始まった頃には稲穂の部分を摘みとる「穗摘み」が主流でした。これは、稲の成熟期が一

◆コレクション・データ◆

時代：弥生時代中期

調査：唐古・鍵遺跡 第59次調査

発見年：1996年

大きさ：長さ 13.7 cm、厚さ 0.6 cm

展示ケース：第1室「弥生の食」

定しなかったため、尖った稲穂を順番に摘みとるために適した方法と考えられます。「根刈り」は稲の品種改良が進み、稲の成熟期が安定することで、はじめて可能になった方法でしょう。

さて、石庖丁は朝鮮半島から中国大陸にかけて広く出土しています。中国では華北を中心に分布し、キビやヒエといった雑穀の収穫具として利用されました。今から約5000年前には、華北でも稲が栽培されますが、この時、雑穀用の石庖丁が稲の収穫にも使われました。これが稲作の伝播に伴って、朝鮮半島から日本へと伝わったと考えられています。ただし、石庖丁の形や刃の付け方は地域によって様々で、各地域における稲作の伝わり方は一様ではなかったようです。

日本でも各地の石包丁には形や石材に違いがみられ、試行錯誤を繰り返しながら、稲作を始めた様子がうかがえます。



井戸に供献された河内の土器

No.4 河内から運ばれた土器

土器が語る弥生時代の交流

◆コレクション・データ◆

時代：弥生時代中期

調査：唐古・鍵遺跡 第37次調査

発見年：1989年

大きさ：高さ20cm、胴部径17.3cm

展示ケース：第1室「交流と戦い」

唐古・鍵遺跡では、さまざまな地域から交易によって運ばれた品物が出土します。今回、紹介する河内から運ばれた土器も、そうした資料の一つです。

この土器は、壺形土器の一端に半円状の把手を付けたもので、水差形土器と呼ばれています。名前のとおり、水をくったり注いだりするのに適した形をしています。底部に重心がある下膨れの胴部と、緩やかな切れ込みのある口縁部、全体に描かれた櫛刷文様は水差形土器として優品の一つです。

さて、河内（大阪府）のなかでも生駒山西麓で作られた土器は、チョコレート色を呈しています。これは、土器の粘土（胎土）の中に、角閃石という黒色の鉱物が含まれているため、このような色に焼き上がるようです。今回の水差形土器は、チョコレート色が淡く中河内地域（八尾市から東大阪市周辺）で作られたと思われます。また、土器の外側に描かれた櫛刷文様もこの河内地域で多用される文様です。

各地の弥生土器を見ていくと、土器の形や文様に地域ごとの特徴が見られ、どこで作られた土器かを見分けることができます。また、粘土の特徴によって、土器の製作地を具体的に限定できるケースもあり、生駒山西麓で作られた土器は、こうした資料の代表格です。

他の地域から運ばれた土器を、考古学では「搬入土器」と呼んでいます。土器が移動する背景には、土器に物を入れて運んだり、土器（家財）を持った人が移動したりと、さまざまなケースが想定され、当時の交流を考える重要な糸口となっています。特に、生駒山西麓で作られた土器は、精巧に作られた優品が多いことから、土器自体が商品として流通していたとする意見もあります。

土器の細かな観察から、当時の交流を読み解く作業は、考古学にとって重要な研究テーマの一つです。



側面



正面

No.5 鶏をかたどった土製品

聖なる鳥、ニワトリの歴史

鶏は朝の到来を告げる鳥として、日本人には馴染みの深い動物です。鶏は大陸から運ばれた家畜の一つで、約6000年前に、東南アジアから中国南部で家畜化されたと考えられています。

「日本には、いつから鶏がいたのか？」今回紹介する資料は、この問題を解く重要な鍵となるものです。縄文時代の貝塚から鶏の骨が出土した例もありますが、いずれも古い調査例で今では疑問視されています。現在確実な資料は、今回紹介する土製品で、弥生時代後期には日本に鶏がいたことを示しています。

唐古・鍵遺跡の鶏形土製品は、立派な^{とて}鶏冠や大きな^{くし}嘴、目、耳朶が表現され、一見して鶏とわかる良好な資料です。その精悍な顔立ちは、日本にもたらされた当初の鶏を彷彿とさせ、弥生の人の造形美には驚かせられます。この土製品は、頭部から下が細い棒状になってしまっており、別作りの胸部に頭部を差し込んで一体としたもので、復元すればほぼ実物大になるでしょう。

◆コレクション・データ◆

時代：弥生時代後期

調査：唐古・鍵遺跡 第11次調査

発見年：1981年

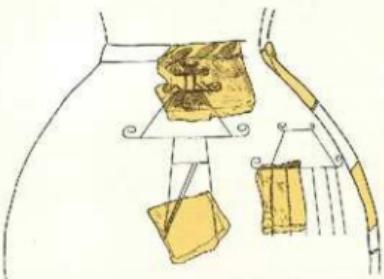
大きさ：高さ11.1cm、頭幅4.1cm

展示ケース：第1室「まつりといのり」

ところで、鶏の肉や卵が食用とされたのは、江戸時代以降と考えられています。近年、広島県草戸千軒遺跡では、食用にされたと思われる鶏の大脛骨が出土しましたが、やはり中世以前には遡らず、鶏を食べるということは比較的新しい風習です。

『古事記』では、鶏は時を告げる「常世の長鳴鳥」として登場し、神聖な鳥と考えられていたようです。古墳時代には、鶏形の埴輪があり祭祀的な目的で使用されたものでしょう。また、平安時代の絵巻物には闘鶏の場面がみられますが、『日本書紀』雄略記には、占いを開鶏の勝敗で判定したという記事があり、やはり祭祀に関連する鳥であったことがわかります。

こうした鶏の扱われ方が、弥生時代まで遡るのであれば、動物の家畜化が単なる食用にとどまらず、祭祀や精神文化に関連するものとして注目されます。



塔閣を描いた絵画土器の復元図

No.6 楼閣を描いた土器

唐古・鍵遺跡のシンボルタワー

◆コレクション・データ◆

時代：弥生時代中期

調査：唐古・鍵遺跡 第47次調査

発見年：1992年

大きさ：縦8cm、横10cm

展示ケース：第1室 中央ケース

弥生時代の絵画土器として、最も著名なものが、この樓閣を描いた土器です。

弥生時代の絵画土器は、土器の焼成前にヘラ状の工具で線刻をしたもののが大半です。高床建物や人、鹿、魚などムラ周辺に存在する対象物が描かれました。この樓閣の絵は、高さ50cmほどの壺に描かれたもので、3つのかけらが残っていました。

弥生時代の建物は、これまで竪穴住居や高床倉庫と考えられてきました。こうしたイメージは、戦後直後に行われた登呂遺跡の調査による部分が大きく、教科書などでもおなじみのものでした。唐古・鍵遺跡の土器に描かれた樓閣は、二階または三階建ての重層構造と考えられ、建物の規模や構造において、これまでの常識を覆すものだったのです。

ところで、土器に描かれた樓閣は、具体的にどのような建物だったのでしょうか？多くの学者が連想したのは、中国の画像石や明器（墓に供えるための焼物）にみ

られる樓閣建物でした。樓閣は、中国では前漢時代後期に出現し、後漢時代に普及しました。特に中国の南方では、樓閣の最下層に壁のみられない例があり、唐古・鍵遺跡の樓閣を考える上で、参考になるかもしれません。

次に大きな問題となったのは、絵画の描かれた経緯です。中国でみられる建物が、どうして唐古・鍵遺跡において土器に描かれたのでしょうか？

ある学者は、中国を訪れた倭人や、中国から来た漢人が、中国の樓閣を描いたと考えました。しかし絵画土器の題材は、身近に実在するものを描いた例が多く、唐古・鍵遺跡に樓閣が存在した可能性も残ります。こうした問題の解決は、将来的な発掘調査が期待されます。

いずれの考えを支持するにせよ、大陸の文化的影響が、近畿に及んでいたことは確実で、当時の唐古・鍵ムラが、中国の史書にみる「國」のひとつであったと考えられます。



盾と戈をもつ人物の絵画土器（清水風遺跡）

No.7 盾と戈を持つ人物模型

絵画のシャーマンを復元する

◆コレクション・データ◆

製作：2004年

モデル：清水風遺跡 第2次調査

「盾と戈をもつ人物」絵画土器

大きさ：高さ 51 cm (縮尺 3 分の 1)

展示ケース：第1室 「まつりの風景」

今回紹介するコレクションは出土品ではなく、ミュージアムを開館するあたり製作した模型で、約2000年前のまつりに参加した人物を3分の1のサイズで製作したものです。

モデルは、清水風遺跡出土の絵画土器に描かかれている「盾と戈を持つ人物」の線刻画です。この絵画は、ヘラでシンプルに刻まれているので、立体的で色彩を有する模型を製作することは、さまざまな点で考証を必要とし、大変難しい課題でした。

模型では、人物の衣装や持ち物、髪型、肌の色などさまざまな点が問題となりました。モデルの線刻画では、人物の頭に冠状のものが描かれています。これは民族（俗）学的な例証から鳥の羽で飾られた被り物とするのが大勢の見解です。したがって、鳥の羽をつけた被り物を想定し、男性が着けるものなので雄雄しい鳥としました。そこで、唐古・鍵遺跡から鷹の骨が出

上しているので、その羽で飾りつけました。また、手に持つ盾と戈も唐古・鍵遺跡から出土した盾や戈を参考にし、情報が不足する部分は、各地の遺跡から出土した遺物で補い復元しました。

このようにして再現した模型の人物は、一体どのような人だったのでしょうか。金岡恕氏は、各地の弥生遺跡から出土する武器形の木製品（戈や剣など）が祭儀の際の模擬戦に用いられたのではないかとしています。また、近藤喬一氏は、盾と戈を持つ人物を戦闘儀礼風の踊りをする人とし、農耕儀礼を想定しています。2人の見解はまさに、この人物が弥生時代のまつりを執り行う人物だったことを示しています。

既に失われた2000年前の色や行為を再現することは至難の業ですが、さまざまな出土品の情報を総合することによって弥生時代の儀礼が復元できることをこの模型は語っています。



No.8

ヒスイ勾玉を納めた 褐鉄鉱容器

勾玉をいれた弥生時代の宝石箱

奈良市から平群町にかけて分布する200万年前の大阪層群内で形成される褐鉄鉱は、良質な粘土の周辺に鉄分が凝縮して生成された自然の鉱物です。表面は褐色を呈し、5mm前後の砂礫が多く付着し、大きいものでは1.5mもあります。

褐鉄鉱の内部の粘土は乾燥収縮し、それが内壁に当たって音をたてるため、江戸時代の好事家の間では「鳴石」や「鉢石」として、珍重されていました。

ミュージアムに展示されている褐鉄鉱は、発掘調査時には内部に泥が充満しており、単なる岩石として取り上げられていました。その後の遺物洗浄で内部の泥を除去すると、中に2個のヒスイ勾玉と土器のかけらが入っていることが判明しました。

出土状況から判断して、中空の褐鉄鉱に2個のヒスイ勾玉を入れ、土器片で蓋をしたと推定できます。この褐鉄鉱は、まさにヒスイ勾玉を入れた宝石箱といえます。

◆コレクション・データ◆

時 代：弥生時代中期

調 査：唐古・鍵遺跡 第80次調査

発見年：2000年

大きさ：縦14.5cm、横13.2cm、高さ6.9cm

展示ケース：第1・2室 ゲート小窓

中国では、褐鉄鉱の中の粘土が「太一（乙）余糧」・「禹余糧」と呼ばれ、薬として利用されました。現在でも、下痢止めなどの漢方薬として販売され、山東省では「木魚石」とも呼ばれています。

「太乙禹余糧」という名称は、中国では4世紀に葛洪が著した『抱朴子』の中に早くもみられ、不老長寿を理想とする神仙思想の薬として珍重されてきました。日本でも正倉院に「太一禹余糧」が所蔵され、薬として利用されたと考えられています。

唐古・鍵遺跡で出土したヒスイ勾玉を納めた褐鉄鉱容器は、全国でまだ類例がありませんが、唐古・鍵ムラの人が褐鉄鉱の中の粘土を仙薬として使っていたならば、2000年前の弥生時代に中国の神仙思想を理解していたことになります。

褐鉄鉱容器の発見は、物や技術だけではなく、精神文化の面においても、大陸との深い関連があったことを示しています。



ヒスイ勾玉の収納復元図

No.9

褐鉄鉱容器に 納められたヒスイ勾玉

勾玉に込めた弥生人の想い

今回紹介する2点のヒスイ勾玉は、褐鉄鉱容器に納められていたもので、大きい方は白濁部分に薄い緑色が混ざったもの、小さい方は濃緑色の透け質のヒスイが使われています。この2つは、弥生時代に使われたヒスイの中でも、最も良質な部類のものです。

さて、ヒスイは高压変成帶で生成される岩石で、正式には「ヒスイ輝石」(jadeite)といわれます。硬度は6から7と硬質で、宝石として人気があります。日本では約10カ所の産地が知られていますが、蛍光X線による科学的な分析で、全国で出土するヒスイ製品の大部分が、新潟県の姫川流域産であることが確認されています。

姫川のヒスイをめぐっては、「万葉集」に次のような歌があります。

沼名川の底なる玉 求めて 得てし玉かも 拾いて

◆コレクション・データ◆

時 代：弥生時代中期

調 査：唐古・鍵遺跡 第80次調査

発見年：2000年

大きさ：(写真左) 長さ3.6cm、重さ16.4g

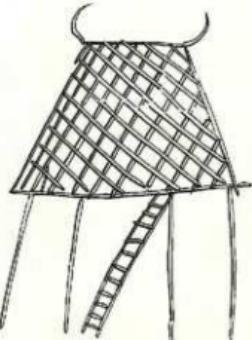
(写真右) 長さ4.6cm、重さ48.2g

展示ケース：第1・2室 ゲート小窓

得てし玉かも あたらしき 君が 老ゆらく 惜しも
沼名川は姫川と考えられ、古代には川底からヒスイ
を拾っていた様子がうかがえます。また、姫川下流の
青海海岸では、波で打ち上げられたヒスイをみること
ができます。『三国志』魏志倭人伝には「青大句(幻)珠」とあり、ヒスイを示すと考えられていますが、中国では「珠」は川や海で採れるものを意味しており、姫川
流域でのヒスイの採取方法と一致します。

褐鉄鉱容器に納められていた2点の勾玉は、神仙思想の仙薬（「太乙萬余餉」との関連が注目されます。方格規矩鏡の銘文には「神仙界を訪ねて、玉を食べ黄金を
摺れば、官位は昇進し子孫は繁栄する」とあり、玉と
神仙思想との深い繋がりが見受けられます。

唐古・鍵遺跡で出土したヒスイ勾玉は、弥生人が玉
に込めた想いを読み解く鍵になるかもしれません。



板梯子を表現した絵画土器（第33次）

No.10 刻みのある板梯子

梯子を昇る存在

◆コレクション・データ◆

時代：弥生時代後期

調査：唐古・鍵遺跡 第54次調査

発見年：1993年

大きさ：長さ 118.5 cm、幅 18.9 cm

展示ケース：第2室 「弥生の住まい」

板梯子は長い板材の片面に、足を掛ける段（踏面）を削り出したもので、平坦な上面の段と斜めに挟った下面で構成されます。

唐古・鍵遺跡では、5例ほどの板梯子が出土していますが、完全な形のものは、今回紹介するものと製作途中品の2例しかありません。板梯子は大きな部材なので、壊れたり、転用されたりして原形では残らないことが多いです。展示している板梯子は、直徑約20cmの丸太材を板状に削ったもので、下端は地面に突き刺すために尖っています。よく使い込んだ梯子のため踏面の部分は擦り減っています。

ところで、1936年の唐古池の調査で出土した絵画土器には、2人の人物が建物にかけた梯子を登っていく姿が描かれており、高床建物の存在が注目されました。戦後、登呂遺跡の調査で板梯子が発見され、高床建物の存在が初めて証明されることになったのです。弥生時代の板梯子は、1.5から2mのものが一般的でおよそ60度の角度で立てかけると、高床建物の床高は

1.3から1.8mと復元されます。

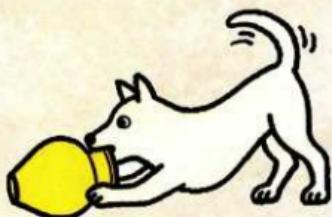
しかし、近年各地で大型建物跡が発見され、絵画土器の高床建物が、大型建物である可能性が高まっています。唐古・鍵遺跡では大型建物（模型）の床高を2.6m、池上曾根遺跡（大阪府）では床高を4mと復元しており、これにかける梯子となると3m以上の長さが必要です。黒井遺跡（佐賀県）では3.8mの板梯子が出土していますが、3mを超える例は少なく大型建物の梯子については検討の余地が残ります。

『出雲国風土記』には、「高屋（高い社）を建て、そこに高椅（高い椅子）を架けて昇降させることで、靈威を依り憑かせようとした」という記述がみられます。また『播磨国風土記』や『日本書紀』にも「椅」に関する記述がみられ、「椅」を、神の世界に往来する装置と考える説もあります。

板梯子は、大型建物の性格を考えるうえで重要な鍵を握っています。

Inu ga Kanda Doki

Tooth-mark of dog on Yayoi Pottery



犬が土器を噛んでいるようす

No.11
犬の噛み痕が残る土器

イヌと人間の付き合い

◆コレクション・データ◆

時代：弥生時代中期

調査：唐古・鍵遺跡 第20次調査

発見年：1985年

大きさ：高さ 7.7cm

展示ケース：第2室 「土器をつくる」

今回は、犬の噛み痕が残る土器を紹介します。この土器は、壺の口縁部に小さな穴が半円弧状に3列並んでおり、形状から犬が数回噛んだものと考えられます。噛み痕は、土器を乾かしている時に付けられたもので、弥生の人がそれに気付かず、焼いてしまったものでしょう。あるいは、土器の噛み痕を見て犬を叱りつけたかもしれません。のどかなムラの光景が目に浮かびます。

なお、この土器は揖津地域（兵庫県南部・大阪府北部）で製作され、唐古・鍵ムラに運ばれてきたことが判明しています。小さな土器片にも、多くの情報が隠されていたことを示しています。

さて、犬はオオカミを祖先とする動物で、人類にとって最も古い家畜と考えられています。近年のDNAの分析では、一万五千年前の東アジアで、犬の飼育が始まったと考えられています。日本では、縄文時代の愛媛

県上黒岩岩陰で犬を埋葬した例などがあり、狩猟活動のパートナーとして、大切に扱われていたようです。

ところが弥生時代には、犬の埋葬例は少なく、唐古・鍵遺跡をはじめ、多くの弥生遺跡では骨がバラバラで出土することから、食用にしたと考えられています。この時代には、朝鮮半島から新種の「北方犬」が入ってきたとの研究もあり、犬に対する考え方方が大きく変化したかもしれません。

その後、江戸時代にも犬を食用としており、番犬や狩猟犬として大名の財産になった愛犬や愛玩犬とされた狛のほかは、野良犬が圧倒的に多かったようです。庶民が犬をペットとする習慣は、定着していなかったのでしょうか。

現在、私達にとって犬は身近なペットですが、犬と日本人との関係にはさまざまな歴史が隠されています。



土製鋳型の構造と鋳造法

No.12 銅鐸を鋳造した 土製鋳型の外枠

弥生時代の先端技術

◆コレクション・データ◆

時代：弥生時代後期

調査：唐古・鍵遺跡 第3次調査

発見年：1977年

大きさ：高さ 40.7 cm、幅 26.3 cm

展示ケース：第2室 「青銅器をつくる」

弥生時代には、米作りとともにさまざまな新しい技術や物が大陸から伝来しました。金属器を手にしたのもこの時代でした。青銅器の製作は、金属に対する化学的な専門知識や豊富な経験を必要とし、なかでも中空の銅鐸づくりは弥生時代の最も高度な先端技術でした。

きゅうとう 銅鐸の鋳造は、同じ形の鋳型を合わせ、その内部に銅鐸の厚み分を削った土製の中型を据え、青銅（銅と錫の合金）に鉛を加えたものを流し込みます。鋳型には、石製と今回紹介する土製鋳型の外枠があります。

この土製鋳型の外枠は、土器と同じように粘土を野焼きした丸瓦状のものです。外側には、石製鋳型と同じように把手が作り出され、下端には2つの鋳型を正確に合わせるための目印が付けられています。本品は形状や大きさが石製鋳型と共通する部分があることから、銅鐸の鋳型外枠として推定できます。本来は内側

に真土と呼ばれる繊かな粘土を3cmほど貼りつけ、文様を刻み鋳型としたものですが、真土は鋳造後に剥がれ落ちたようです。そのため鋳造された銅鐸は特定できませんが、外枠の大きさから33cmほどであったことが分かります。

石製鋳型は、丈夫で6回前後も使えますが、青銅を流し込んだ時に発生するガスを逃がすのが難しく、失敗する確率が高い鋳型です。また、最適な石材の入手や大きさには限界があります。これに対して土製鋳型は、前述した石製鋳型の欠点を補う点で優れており、特に銅鐸が大型化する弥生時代後期以降には、土製鋳型へと移行しました。

今回紹介した土製鋳型の外枠は、まさに鋳型が石製から土製へと変革する時期のもので、銅鐸鋳造の技術的な転換を考えるうえで重要な意義を持っています。



集積されたサヌカイトの原石

No.13

唐古・鍵に運ばれた サヌカイトの原石

石材が語る弥生時代の流通

私たちが使っている鉄やナイフは、ステンレスやセラミック製ですが、弥生時代には物を切る道具としてサヌカイトで作った打製石器が使われました。

サヌカイトの原石は、表面が風化して灰白色ですが、割ると中は黒色で、貝殻状に割れる特徴をもちます。割れ口はガラスのように鋭く、ノートや新聞紙などを簡単に切ることができます。

サヌカイト（和名：讃岐岩）は、ガラス質・無斑品質の安山岩で、1891年にドイツ人の地質学者・ヴァインシェンクによって、産地の香川県にちなみ命名されました。叩くと高い金属音が響くことから、「カンカン石」として親しまれています。

類似した岩石は、九州から愛知県まで分布しており、特に、二上山（奈良県・大阪府）、五色台（香川県）、冠高原（広島県）で産出するサヌカイトは、約3万年前の旧石器時代から打製石器の素材として使われました。

◆コレクション・データ◆

時代：弥生時代中期

調査：唐古・鍵遺跡 第37次調査

発見年：1987年

大きさ：最大長25.9cm、重さ3.9kg

展示ケース：第2室「石を割る」

弥生時代の唐古・鍵遺跡でも、10km離れた二上山のサヌカイトを使って、石鏨や石剣などを作っていました。唐古池南側堤防の調査では、重さ約10kgの人頭大のサヌカイト原石が、6個集積された状態で見つかっており、打製石器の素材として二上山のサヌカイト原石を多量に入手していたことがわかります。この中には、原石の一端を打ち割った例があり、サヌカイトの品質を確かめたと考えられます。

これに対して、唐古・鍵遺跡周辺の遺跡では、サヌカイトの原石や製作途中の未完成品、石を割る際に飛び散る石屑^{くず}が出土するケースはわずかです。唐古・鍵ムラで作られた石器が、配されていた可能性が強いでしょう。

このようにサヌカイトの道を追跡することは、當時の流通やネットワークの解明につながります。



紡錘車で糸を撫ぐ

No.14 糸を撫る紡錘車

回転を利用した新技術

◆コレクション・データ◆

時代：弥生時代中期

調査：唐古・鍵遺跡 第24次調査

発見年：1986年

大きさ：直径 5 cm、重さ 17.1g

展示ケース：第2室 「糸を撫る」

弥生時代に伝わった技術の一つに、機織りがあります。機織りの道具や布、糸などが出土することは稀ですが、糸に撫りをかける紡錘車から、機織りの一端を知ることができます。

紡錘とは、回転運動を利用して糸に撫りをかける道具で、糸を巻き取る紡革と、はずみ車の役割を果たす紡輪によって構成されます。紡錘車は、このうち紡輪にあたる部分で、直径4~6cmの円盤形を呈します。また、その中央には、紡茎を差し込む穴があります。

紡革は木製のため腐ってしまうケースがほとんどですが、東大阪市鬼虎川遺跡では、紡輪に紡茎を差し込んだ紡錘が出土しています。

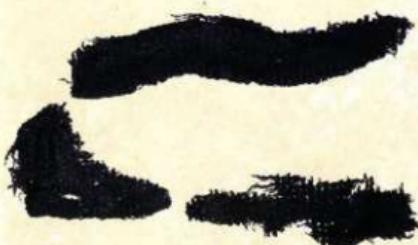
唐古・鍵遺跡からは、土器のかけらを利用した粗雑な紡錘車が多量に出土しますが、少數ながら精巧な仕上げをした土・石・角・木製の物も見られます。写真的紡錘車は、鹿角の根元を輪切りにし、薄く丁寧に磨き上げた精巧な仕上げが施されています。

さて、糸に撫りをかけるには、まず紡茎の先端に糸をかけ、糸で紡錘を吊り下します。右利きの場合は左手で糸を持ち、右手で紡錘車を回転させます。紡錘車の回転が糸に伝わり、左手で押された部分まで糸に撫りがかかります。好みの強さに撫りがかかるたら、出来上がった糸を紡茎に巻き取り、後は同じ作業を繰り返します。

こうした方法は、菱川師宣の「和国百姓」（江戸時代）にも描かれており、古代以降も、紡錘を使って糸に撫りをかけていたようです。

また、紡錘車にはさまざまな重さがあり、軽い物は細い糸、重い物は太くて丈夫な糸や紐を撫るのに使われたと考えられています。このように、紡錘車の重さは多様な糸の生産を表しており、さまざまな場面に応じて使い分けていたのでしょうか。

このような資料からも、唐古・鍵ムラの人たちの繊細な「モノづくり」を垣間見ることができます。



弥生時代における布の織り密度

時 期	資料数	織り密度 (1cmに対する縦糸数)
弥生前期	3	21.7×13.7本(平均)
弥生中期	48	16.1× 9.0本(平均)
弥生後期	85	17.7× 9.1本(平均)
弥生時代の全平均	136	136× 9.2本(平均)
唐古・鍵(中期初)	5	25.8×16.2本(平均)

1988 布目順郎「唐古・鍵遺跡出土の纖維製品について」
『唐古・鍵遺跡第21・23次発掘調査概報』

No.15

大麻製の布切れ

炭化した布切れが語る世界

二十数片の布切れが、唐古・鍵遺跡から出土しています。織りや材質などの調査から、もともとは一連の布であったと考えられています。布は植物質なので、地中で腐って無くなりますが、今回出土した布切れは、偶然に火を受け炭化したため、原形を保った状態でした。このように、遺跡の発掘調査で出土する布は、大変貴重な遺物なのです。

さて、この布切れは、弥生時代に大陸から伝來した機で織った織布で、故・布目順郎先生（京都工芸纖維大学名誉教授）の研究によって、大麻製であることが明らかにされました。織りが細密で、経糸や緯糸の一部に併糸がみられることから、当時の布としては高級品であると指摘されました。特に併糸は、一般には平綱にみられる技術で、中国では併糸によって織った平綱を「縑」と呼んでいます。

綿の本場・中国でも「縑」は平綱の高級品で、紙と

◆コレクション・データ◆

時 代：弥生時代中期

調 査：唐古・鍵遺跡 第23次調査

発見年：1985年

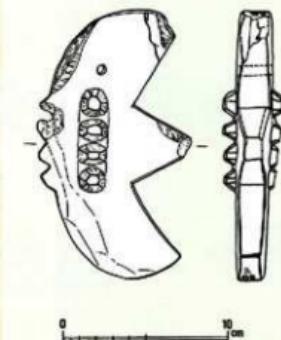
大きさ：長さ3.4cm、幅6mm(写真上)

展示ケース：第2室 中央ケース

して利用された帛布などに使われました。また北朝鮮の平壤郊外に点在する樂浪漢墓では、縫入れの衣服に「縑」が使われた例があります。唐古・鍵遺跡の布切れは大麻製で、平綱の「縑」とは異なりますが、細密な麻布の製作に平綱の技術が応用されたことは、大変興味深い事実です。

『三国志』魏志倭人伝には、「禾穉や苧麻を植え、養蚕を行い、糸を紡ぎ、細苧縑絲を産出する。」とあり、倭国では苧麻製の苧やが作られたとされています。これまで日本では「縑」の出土例はありませんが、『三国志』魏志倭人伝には、倭王が魏に献上した品目として「縑青縑」がみられ、将来、発見される可能性もあるでしょう。

このように、黒色に炭化した小さな布切れからも、当時の国際関係を垣間見ることができるのです。



大形粗製で退化した子持勾玉
1977千賀久「櫻井茶臼山古墳西側出土の子持勾玉」
『青陵』No.33

No.16 まつりに使われた 子持勾玉

古代人が感じた靈力？

◆コレクション・データ◆

時代：古墳時代中期（5世紀後半）

調査：唐古・鏡遺跡 第38次調査

発見年：1989年

大きさ：長さ6.5cm、重さ67.5g

展示ケース：第3室 「田原本のあゆみ」

勾玉は、日本では縄文時代に出現し、特にヒスイ製の勾玉は、弥生時代から古墳時代を通じて貴重な装身具として扱われました。このような勾玉も、時代や材質によって、様々な形態がありますが、今回紹介する資料は、古墳時代中期に作られた「子持勾玉」です。

子持勾玉とは、大型の勾玉の表面に勾玉状の小さな突起を作り出したもので、滑石や碧玉で作られています。このような子持勾玉は、5世紀中頃に出現し、7世紀まで作られました。唐古・鏡遺跡出土の子持勾玉は滑石製で、腹面に1つ、背面と両側面にそれぞれ3つの計10個の突起がみられます。勾玉の横断面は厚く、重厚感があり、子持勾玉としては初期の形態を示しています。

ところで、子持勾玉の用途をめぐっては、考古学界で長らく論争が続いてきました。江戸時代の国学者である谷川士清は、これを「太古の剣頭」とし、石劍の柄頭と考えました。こうした説は、その後『雲根志』

を著した木内石亭や藤貞幹らに受け継がれ、江戸時代にはT字形に装着する柄頭とされました。

子持勾玉を、初めて勾玉の一種と考えたのは神田平で、明治時代に入つてからのことでした。その後も、子持勾玉が魚の形を真似たとする考え方やこれが銅鐸の鱗と関連するという指摘など、様々な説がありました。しかし、子持勾玉の上端部にみられる孔が、勾玉の孔に一致することから、現在では、勾玉をモデルにしたという考え方が一般的です。

子持勾玉は集落遺跡から出土するケースが多く、アクセサリーとして古墳に副葬されるヒスイ製の勾玉とは、性格が異なります。また、子持勾玉の特異な形態が、玉のもつ靈力や増殖力を感じさせることから、これが呪術に使われたとする説もあります。

このように、玉に何らかの靈力を認める感覚は、原始も現代も変わりないです。



No.17 笠形採集の和同開珎

町内、最古の「お金」の話

私たちの生活において、お金はなくてはならない存在です。日本でのお金の使用は古代まで遡りますが、町内でも奈良時代に発行された和銅開珎が採集されています。

この銭貨は、笠形池の南側水路で熊本秀和氏（当時、田原本中学校二年生）が採集し、同校の石橋源一郎教諭（当時）を通じて届けられました。

和銅開珎は、和銅元年（708）に発行された皇朝十二銭で、銅錢・銀錢の二種類がみられます。円形で中央には四角い孔があり、時計回りに「和銅開珎」の文字が配置されています。すでに江戸時代から古銭学の分野で注目され、「開」の字の門構えが閉じる古和銅と、隸書風に開く（開）新和銅に分類されています。今回の和銅開珎は、新和銅に当たりますが、古和銅・新和銅の年代については現在でも論争が続いています。

ちなみに「珎」を「寶」の略字とし、「ワドウカイ

◆コレクション・データ◆

時代：奈良時代

出土地：笠形池 南側側溝

発見年：1982年

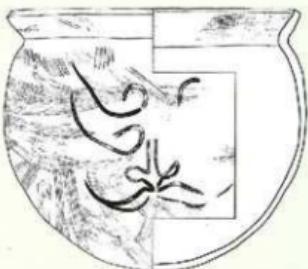
大きさ：直径 2.5 cm、重さ 1.95 g

展示ケース：第3室 「田原本のあゆみ」

ホウ」と読む考えもありましたが、近年では「ワドウカイチン」とするのが一般的です。

かつて和銅開珎は、日本最古の銅錢とされてきましたが、近年、飛鳥池遺跡において富本錢が発見され、和銅開珎に先行する銅錢の存在が明らかになりました。ただし、発行数が飛躍的に増えるのは、和銅開珎の段階で、東北から九州まで広い範囲で出土しています。また、中国の西安市何家村（唐長安城）では銀錢が、黒龍江省東京城（渤海海上京龍泉府跡）では銅錢が出土し、遣唐使や渤海使の交流によって海外にも運ばれていたと考えられています。

町内では、奈良時代の遺跡の調査が少なく、具体的な様相は不明ですが、和銅開珎は都衙や寺院、駅家から出土するケースも多くあります。笠形は、古代の道路「中ツ道」や『日本書紀』に登場する「村屋（神社）」に近接しており、将来、古代の遺跡が見つかるかもしれません。



墨書人面土器の実測図

No.18 まじないに使った 墨書人面土器

もじな
「巷」でのまつり

◆コレクション・データ◆

時代：奈良時代

調査：保津・宮古遺跡 第18次調査

発見年：1997年

大きさ：高さ 20.7 cm、口径 22.3 cm

展示ケース：第3室 「田原本のあゆみ」

今回紹介する墨書人面土器は、保津・宮古遺跡の古代道路跡である「保津・阪手道」の側溝から出土しました。墨書人面土器は、土師器の養脣部に人の顔を筆描きしたもので、奈良時代から平安時代にまじない用の土器として流行しました。人面は男性の顔で輪郭は描かれず、眉や目、鼻、髭、口が主に描かれています。

保津・宮古遺跡で出土した墨書人面土器は、顔が表裏両面にあり、つり上がった眉や目、鉤鼻、髭を強調的に手馴れたタッチで描いています。

さて、墨書人面土器は河跡や溝から出土するケースが多く、大和郡山市稗田遺跡では下ツ道と交差する河跡（大溝）から、京都府向日市長岡京では溝から出土しています。また、これらの遺跡では、土馬や人形木製品も出土し、疾患の防止や病気の治癒、雨乞いや止雨のまじないに使われたと考えられています。保津・宮古遺跡でも付近から土馬や畜車が出土しており、同様の祭祀が行われたのでしょうか。

『延喜式』や『西宮記』には、小石や玉を入れた小壺に、天皇が息を吹きかけて穂を閉じ込め、これを流したという記述が見られ、墨書人面土器がこうした穂の儀式に使われたとする説もあります。

いずれにせよ、このような祭祀具は、平城京や長岡京・平安京などの都や官衙で用いられることが多かったのです。

ところで、「保津・阪手道」は、奈良盆地を斜めに縱断する太子道を横切り、阪手では下ツ道と、村屋神社周辺では中ツ道と交差するようです。今回の墨書人面土器や土馬・畜車が出土した地点は、太子道との交差点（巷）で、交通の要衝として注目されており、この周辺では、飛鳥時代以降、掘立柱建物が展開し、官衙的な性格をもった地域と考えられます。

このように、保津・宮古遺跡の性格を推理するうえで墨書人面土器や桂、道路、建物は重要なキーワードになりそうです。

Ushi-gata Doseihin

Clay Figurine of Cattle in Edo Period



型作りの接合部（上面から）

No.19

牛をかたどった土人形

江戸時代、陣屋の民間信仰

田原本は、江戸時代に平野権平長勝によって陣屋が置かれ、政治や経済の中心として発展しました。今回紹介する出土品は、平野氏陣屋跡から出土した牛をかたどった土人形です。

この出土品は、牛の形をした素焼きの土人形で、型作りで作られています。牛を縦方向に割った二つの型に粘土を押し当て乾燥した後、両者を接合して完成させます。中は空洞になっていて、内面には指で押した跡が残っています。

さて、この土人形は左を振り向いた牛形で、背中に荷輪が表現されています。荷輪の一部には赤い顔料が残っており、本来は彩色されていたと考えられます。また、鼻ぐりや手綱・胸懸の表現もみえ、「荷を運ぶ牛」をかたどったものと考えられます。

こうした土人形は16世紀ごろから製作され、西日本

◆コレクション・データ◆

時代：江戸時代

調査：平野氏陣屋跡 第4次調査

発見年：1994年

大きさ：高さ9.5cm、長さ15.7cm

展示ケース：第3室「田原本のあゆみ」

では京都の伏見人形が有名でした。当初は人物や犬をかたどったものが主体でしたが、17世紀には猪・狐や恵比寿が、また18世紀には節句に関連する梓稚・唐子の楽人や、象・牛・鶏・猫・兎といった動物形の土人形が作られました。平野氏陣屋跡でも、今回紹介する牛のほかに、猪や狐の土人形が出土しています。

このうち猪は庚申信仰、狐は福井信仰に関連し、家族の幸せや商売繁盛を願ったものと思われます。また、今回取り上げた牛は、江戸時代には子どもの疱瘡除けや、出世開運・五穀豊穣にご利益があると考えられており、当時の民間信仰に関連するものでしょう。

土人形が出土した場所は、現在の町役場の南西隅で、江戸時代には、陣屋に伴う家臣団の屋敷地があつた所です。家族の健康や幸せを願う、武士のささやかな想いが垣間みられます。



盾持人埴輪の出土状況

No.20 入れ墨を表現した 盾持人埴輪

入れ墨が語る古代の社会

第3室入口正面に、人物埴輪の頭部が展示されています。本来この埴輪は、盾を持った人物の胴部と組み合わさるもので、「盾持人埴輪」と呼ばれています。頭部と胴部を別々に作り、頭部を胴部にソケット状に差し込みました。胴部はまだ見つかっていませんが、全体で約120cmの高さになると思われます。

さて、この盾持人埴輪の頭部には、台形状の透かし穴や縫取り線が見られ、冠り物を着けていたと考えられます。さらにこの埴輪で注目されるのは、両頬に見られる鐵状のヘラ描き線です。恐らく入れ墨を表現したものでしょう。

『三国志』魏志後伝には、「男子は大小無く皆跡面文身する」とあり、弥生時代以降、倭国には入れ墨があったとされています。実際に、弥生土器や石棺には、入れ墨をもつ人物の顔を線刻した例があり、後人伝の記述を裏付けています。

しかし、弥生時代に入れ墨を表現した資料は渤海内

◆コレクション・データ◆

時代：古墳時代後期（6世紀前半）

調査：羽子田遺跡 第11次調査

発見年：1998年

大きさ：高さ44cm、最大幅24cm

展示ケース：第3室「埴輪の世界」

や東海、関東・東北に分布し、近畿では見られません。特に、唐古・鍵遺跡では全国の半数以上の絵画土器が集中しますが、やはり人物を描いたものに入れ墨は見られないのです。近畿で入れ墨の表現が出現するのは古墳時代からで、馬を曳く人や盾持人・力士などの人物埴輪に入れ墨が見られます。いずれも5世紀以降と考えられています。

『日本書紀』によると、いわい猪��・馬飼などの職能集団まつむらや安曇氏などの海人集団、隼人・蠻夷に入れ墨が見られるとあります。これらは、大和からみて周辺地域に散地をもつ集団が多く、王権に奉仕するために大和周辺に定住したものと考えられています。入れ墨をもつ人物埴輪は、こうした集団を表現した可能性が高いでしょう。

埴輪に見る入れ墨の表現は、彼らの職能や出身地を語っているかもしれません。

Ie-gata Haniwa

House-Shaped Haniwa



入り口を表現した切り込み部

No.21

祭儀の場を 表現した家形埴輪

「タカドノ」のまつり

◆コレクション・データ◆

時代：古墳時代中期（5世紀前半）

調査：保津・宮古遺跡 第14次調査

発見年：1995年

大きさ：高さ 71cm、正面幅 53.3cm

展示ケース：ロビー展示

奈良盆地の低地部にあたる川原本町にも、かつて数多くの古墳が存在しました。保津と宮古集落の境で実施した保津・宮古遺跡の調査では、5世紀前半に造られた一辺十数メートルの方墳（保津岩田古墳）を検出しています。

この古墳は、墳丘が削られ周濠が残っているだけでしたが、周濠からは墳丘から崩れ落ちた大量の埴輪が出土しました。この中には、今回紹介する家形埴輪のほかに、入母屋造りの家形埴輪や水字貝文様を刻んだ盾形埴輪などがあります。

さて、今回紹介する家形埴輪は、切妻型の屋根をもつ高床式建物で、高床部と床下部で構成されています。床下部は桁行（建物長辺）・梁行（建物短辺）とも2間、高床部は梁行が1間となる構造で、壁面のない開放的な建物です。高床部の桁行側には弧状の切り込みがあ

り、入り口を表現したと考えられます。

また、柱は板状に表現され、一見壁のように見えますが、西大寺東遺跡（奈良市）では、断面が長方形を呈する板状の柱が出土しており、この家形埴輪の柱も長方形の柱を表現したものと考えられます。美國古墳（大阪府八尾市）の家形埴輪には、柱部分に悪霊の侵入を防ぐために盾の線刻が見られます。今回紹介する家形埴輪も、水字貝文様を刻んだ盾形埴輪を伴っており、首長が儀礼を執り行う特殊な建物を型取ったものと類推できます。

なお、美國古墳の家形埴輪には、高床部にベッド状の施設があり、これを儀礼に臨む首長が臥す「牀」とする意見もあります。

古墳に並べられた家形埴輪は、当時の儀式を考えるうえで重要な構成要素の一つとなっています。



本書掲載の唐古・鍵遺跡出土品



唐古・鍵考古学ミュージアム
ミュージアムコレクション Vol.1

発行：田原本町教育委員会

T636-0325 奈良県橿原市田原本町926-1

編集：唐古・鍵考古学ミュージアム

T636-0247 奈良県橿原市田原本町坂手233-1

発行日：2007年3月30日

本書掲載の田原本町内遺跡出土品